

新しい水田農法へのチャレンジ

—大潟村における産学協同の成果—

庄子貞雄 監修

新しい水田農法編集委員会 編

農山漁村文化協会 初版 2007年2月16日発行

A5版 252頁 ISBN 978-4-540-06336-7 定価 2,000円

本書を代表する主なキーワードを五十音順にまとめてみた。「大潟村、環境修復、機械開発、気候、水田農業、地球温暖化防止、土壌の生産力、農家経営、八郎潟残存湖の水質、八郎潟干拓地の植物相・水田雑草、不耕起・無代かき栽培、有機栽培」などが並んだ。「前作物の根によって作られた孔けきが残り、根の伸張を助け、排水性を高める」(1頁)という記述もあった。これは八郎潟干拓地土壌の物理性を長年研究されてきた一大学教員の貴重な成果が引用されている部分である。さらに執筆者の肩書きをみると、農業者、農協関係者、研究者、大学教員、企業関係者、行政関係者などが参加していた。

前述のキーワード筆頭にある「大潟村」は、誰もが知る秋田県八郎潟中央干拓地に建設された新農村である。詳しくは「大潟村干拓博物館」(<http://ac.ogata.or.jp/museum/index.htm>)をインターネットなどで訪ねれば、理解が少しずつ深まってくる。

しかし…、これは一体何が書かれている本なのか？

本書をパラパラめくって、序文と編集後記に目をやれば、壮大な研究グループ「大潟村低投入持続型農業研究会」(O-LISA; Ogata-Low Input Sustainable Agriculture)が、執筆者集団の中核であることがわかった。

ここで“LISA”(低投入持続型農業)の語源を紐解いてみよう。これには、地下水・表層水汚染問題、食品中の残留農薬問題、健康問題、土地肥沃度低下問題、オゾン層破壊問題、野生生物生息地破壊問題などのいわゆる「環境問題」に対処するといった、きわめて視野の広い概念が含まれている。しかも、これは農業者が主体となり、「経済性」「環境保全」「安全性確保」などのためにも農薬や化学肥料を過度に使用せず、生産性を高度に維持し続けようとする農業方式と考えられ、1980年代にはアメリカ農務省(USDA)が世界的な発展性のある実践可能な農業生産方法として提唱していたものである。

本書が、大潟村の土壌から水稲作を經由して地球温暖化までの守備範囲をもつ理由がここにあったのである。

また、「イネ」の学名は“*Oryza sativa*”(オリザ・サティ

バ)であるが、“O-LISA”を命名されたという長野間宏さん(当学会の元会計監査)は、大潟村に愛情を込め、洒落た秋田弁混じりで、「おれさ」→「おりさ」→「おりざ」→「O-LISA」とされたのだろうか…。しかし、これはまったく想像の域にすぎない。

最後に、執筆者集団のことを熟知されている監修者の庄子貞雄先生(東北大学名誉教授、土壌学)が、「序文」のところで編集の経緯と各章・節の解説を8頁にわたり詳述されている。ここを読めば当書評などは全く不要である。しかし、その序文を読むには書店に向いて本書を手にする必要がある。表紙はあきたこまちのようにスベスベして綺麗だし、大潟村に心血を注いできた現場農業実践者、研究者、技術者達の生の声が活字の中からザワザワ聞こえてくるような気がする。

皆様にご一読をお薦めいたします。

目次構成：

写真、序文

I. 私達の農法

(無代かき栽培、苗箱施肥、特別栽培・有機栽培と米販売、畑作、機械開発、家族とともに)

II. 大潟村の農業環境

(大潟土壌の生産力、気候生産力、八郎潟残存湖の利水構造と水質汚濁の関係、八郎潟干拓地の植物相・水田雑草および除草、大潟村の水田農業および農家経営の現状と課題)

III. 新技術へのさらなる挑戦

(水稲の接触施肥技術の新展開、緑肥作物ヘアリーベッチの利用、新技術のための資材、新しい農法の展開方向)

IV. 不耕起、無代かき栽培の普及と環境修復

(進化する不耕起栽培、農家水田の調査からわかった八郎潟残存湖の水質保全対策、不耕起栽培は地球温暖化防止に貢献する、福島県猪苗代湖の水環境保全への取組み、地球温暖化防止に貢献する農業の価値)

執筆者一覧, 編集委員一覧, 編集後記

成岡 市 (三重大学大学院生物資源学研究所)

編集委員: 庄子貞雄 (監修), 原田久富美 (編集委員長),
小野厚平, 金田吉弘, 佐藤 孝, 鈴木英毅, 田中龍生

受稿年月日: 2007年3月6日

受理年月日: 2007年3月8日

著者: 総勢 43名